

〔巻頭言〕

時間をかけて書いたものが伝えられること

地域基礎看護学講座教授 黒江 ゆり子

私たち教育に携わる者は、誰もが毎日の教育活動や研究活動の中で多くのことに迷い、多くのことに悩み、そしていくつかのことに充実感を抱きながら続けているのではないだろうか。そのようなときに、自分が実践してきた諸活動の何かを書き著してみること、あるいは書き著す機会が与えられていることは、その後の活動の一つの原動力になっているように思う。その原動力を得る一つの機会が紀要であり、それはさらに他の機会に繋がる可能性を秘めている。

書き著すものが、教育活動から生まれることもあれば、研究活動から生まれること、あるいは教育に携わる者としての思索から生まれることもあろう。しかしそれがどこから生まれたものであっても、その人にとっては、さらなる活動の一時点を示すに過ぎない。それは、教育活動や研究活動が、時とともに変容していくものなので、完結することがほとんどないからである。

人に伝えることができ、自分が納得できるものを書こうとするからこそ、それは時間がかかり、かつ困難の多い作業に為らざるを得ない。それでも、なんとか時間をやりくりして書き続けてみると、自分の教育活動の課題がみえたり、研究活動の標がみえたり、思索が一步步すすんだりする。

そしてそれを読む者にとっては、その教育活動や研究活動がこれからどのように発展するかを考え、将来の姿に思い巡らすものとなる。すなわち、このような教育活動を実践し、その活動をこのように捉えているとすれば、今後はもっとあのような教育活動を実践するだろうとか、この大学の研究活動にこのような特徴があるとすれば、今後はあのような研究活動にも着手するのではないとか、あるいは教育に携わっている人々が今このような思索をしているとなれば、今後はあも考えるのではないかなど、ある意味ワクワクすることになる。

このように考えると、紀要は一つのコミュニケーション

ン方法であり、それは大学にいる人々の間のコミュニケーションであると同時に、その大学で学んでいる学生と教員とのコミュニケーションでもある。また他大学や他の学問分野とのコミュニケーションでもあるだろう。第8巻を迎える本学の紀要が、国内国外問わずに読まれ、本学の教育活動、研究活動が伝わり、交流のきっかけになることは大いに期待できる。そのためには、数多く掲載されている研究報告や教育実践報告にも、日本語要約のみならず英文要約をつけるようにするといいいのではないだろうか（もちろん、英文要約は依頼することも可能にして）。

紀要を読み返すと、自分の教育活動や研究活動の流れがわかったり、自分の思索の経緯がわかったり、あるいは大学の取組みの歴史がわかったりする。そのような意味においては、一冊一冊の紀要はその大学のライフストーリーに匹敵するのかもしれない。平成16年度に博士前期課程、平成18年度に博士後期課程を開設し、平成20年度に専門看護師課程の開設を予定している本学にとって、今後は、より一層充実した内容の紀要になるであろうし、看護実践研究を推進している本学から、多くのことを日本そして世界へと発信したい。

実践活動は、時間とともに求められるものが変化し、現代社会はその変化が多様である。それまで正しいとされてきた事柄がいつまでもそうであるとは言えない。数日前に、「まなびほぐす」¹⁾という言葉に再び触れることになった私は、紀要をとおして実践者も学生も多様な側面から共に「まなびほぐす」ことができればと願う。

文献

- 1) 大江健三郎: 定義集「人はいかにまなびほぐすか」、朝日新聞、2007年1月23日